



横浜市立大学医学部形成外科学教室 同門会誌 2024

*Department of Plastic and Reconstructive Surgery,
Yokohama City University*



◆ 横浜市立大学医学部形成外科学教室 同門会誌2024 目次 ◆

巻 頭 言	同門会誌発刊にあたって	青木 文彦	1
主任教授就任挨拶	横浜市立大学形成外科に赴任して	林 礼人	2
特別寄稿			
	同門会会長に就任して	前川 二郎	4
	初代同門会会長として	安藤晋一郎	4
形成外科沿革			5
大学病院報告			
	横浜市立大学附属病院	三木亨人 / 林 礼人	7
	横浜市立大学附属市民総合医療センター	小久保健一	8
	高度救命救急センター 形成外科チーム	黒柳 美里	9
関連施設報告			
	地方独立行政法人神奈川県立病院機構		
	神奈川県立こども医療センター 形成外科	小林 眞司	10
	横浜労災病院	山本 康	11
	関東労災病院	荻野 浩希	12
	横浜栄共済病院	岩瀬わかな	13
	済生会横浜市南部病院	安藤 由茉	14
	藤沢市民病院	藤井 晶子	15
	藤沢湘南台病院	篠木 美穂	16
	茅ヶ崎市立病院	三上 太郎	17
追 悼			
	鳥飼先生が残したもの	長西 裕樹	19
	鳥飼勝行先生の思い出	平川 崇	21
	鳥飼勝行先生を偲んで	武田 啓	22
前川二郎前主任教授退任記念会報告			
	退任記念祝賀会を終えて	前川 二郎	24
教室年譜（2022年度、2023年度）			27
新入教室員挨拶			32
医局年間予定			
業 績			
外部資金獲得状況			
同門会会則			
編集後記			

同門会誌発刊にあたって

横浜市立大学形成外科学教室同門会 会長
青 木 文 彦



前同門会会長の安藤晋一郎先生より引継ぎ現在の同門会会長を務めさせていただいている青木文彦です。

横浜市大形成外科は1968年に現在の横浜市大附属市民総合医療センターがある浦舟町の診察室の一角で産声をあげて以来56年の歴史を刻んできました。この間初代診療科長として形成外科診療を始めた塩谷信幸先生から安瀬正紀先生へと黎明期をつなぎ、西條正城先生、吉田豊一先生、鳥飼勝行先生へと成長期を駆け抜けた後、前川二郎先生が初代主任教授として就任することによりまさに成熟期を迎えた感があります。今後は2代目主任教授に就任された林礼人先生という新たな血が流れることにより、横浜市大形成外科がさらなる発展期を迎えるであろうと期待しております。

こういった流れの中で現在では多くの医局員が在籍しておりますが、2000年以前はごく少ない人数で2つの大学病院と関連施設の診療を行っており、同門会そのものも医局会の延長のような形で運営しているような状態でした。したがって現在のような形になった同門会の歴史は浅く、まだまだ黎明期から成長期へと移行しようとする時期くらいにあたるかと思います。現在は会員数も150人を超える組織となり運営方法、運営資金をどう考えるかという時期にきております。会員の皆様方にもご負担をかけることもあるかもしれませんが、よろしくご協力をお願いいたします。

医療の進歩は日進月歩であり、各診療科もそれぞれどのような方向を向いて進んでいけばいいのか常に考え続けるわけですが、それを考える中心となるのは教室を主宰する教授です。現在の林礼人教授は多くの立派な業績を持ち、熱意をもって日々の診療、教育に力を注いでおられます。若い先生たちも同じ方向を向いて研鑽を積んでいけば、きっと素晴らしい発展期を迎えることになるでしょう。そしてその際に持ち続けていただきたいのは「外科的手技の基礎は形成外科にある。」という気持ちです。様々な技術の進歩により、すべての診療科において高いレベルでのスキルが求められる現在ですが、創傷管理をはじめ外科的基本手技を後世に伝えることができるのは形成外科であると思います。若い先生たちもその誇りを持って形成外科という世界に浸っていただきたいと思いますし、それをサポートできるような同門会にしなければならないと思っています。どうかこのまだ成長期に足を踏み入れたばかりの同門会へのご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

横浜市立大学形成外科に赴任して

横浜市立大学形成外科 主任教授
林 礼 人



横浜市立大学形成外科は、1968年に開設された50年以上の長い歴史を有する形成外科学教室になりますが、2022年10月に7代目の科長、そして第2代主任教授として赴任させて頂きました。

私は東京都調布市に生まれ、父親のNIH勤務に伴い、1歳半～5歳までをアメリカで過ごし、皮膚科を開業する母親の影響も受けながら、順天堂大学で学生生活を過ごしました。卒業後は体表面の問題を抱える方々への手助けが出来ればとの想いや皮膚外科手術への興味などから、皮膚科にて初期研修医を過ごしました。その後、外科的手術をより高いレベルで専門にしていきたいとの考えに至り、初期研修医終了後に形成外科に入局しました。

形成外科入局後には、外科系研修を2年間行った後に形成外科初の大学院生として末梢神経再生の基礎研究に勤しみました。大学院卒業後には2年の出向を経て米国ワシントン大学セントルイスに留学し、リサーチフェローとしてラボの数多くの役割を担い、基礎研究を大きく発展させました。

臨床面では実験を通じたマイクロサージャリーへの興味と修練から、様々な分野での再建外科を大学院時代から全面的に任され、頭頸部や四肢への再建のみならず、肝移植や乳房再建にも携わり、再建外科医としての道を歩んできました。とりわけ顔面神経麻痺再建については、順天堂大学形成外科先代教授の梁井皎先生が御専門にされていた影響もあり、特徴的な取り組みを積極的に行い、国内外を通じた数多くの講演や執筆、学術奨励賞受賞といった、多くの実績を重ねています。2026年には日本顔面神経学会を主催予定です。先天性疾患についても丹下一郎初代教授の影響もあり、口唇口蓋裂や小耳症、多合趾症といった代表的疾患への治療にも数多く携わってきました。また、大学院卒業後に出向した三次救急の基幹附属病院では、切断指や広範囲熱傷といった重度外傷例の再建を多数経験しました。そうした中、キャリアを通して注力してきた皮膚軟部良悪性腫瘍領域については、腫瘍外科医として総合的な治療を実践し、様々な講演や執筆、診療ガイドライン作成などに携わるとともに、2022年9月には日本血管腫・血管奇形学会を主催しました。

こうして、形成外科における主要4領域となる外傷、腫瘍、先天性疾患、再建外科の全てにおいて幅広い経験を積んできましたが、自身の研鑽を十分に発揮し、同門会並びに医局の先生方のお役に立つことが出来ればと考えています。

横浜市立大学形成外科との関わりとしては、2003年に横浜形成外科フォーラムで発表させて頂いたことが始まりですが、前主任教授の前川二郎先生をはじめ、多くの偉大な先生方が築き残されてきた尊い財産を大切に次世代に繋げながら、自身の経験や見識を加えることで、横浜市立大学形成外科をさらに発展させていきたいと考えています。

特に、若い先生方には興味を持って生涯取り組める領域やテーマを持って貰えたらと思います。精一杯取り組んだ仕事に対し、発信の機会を持ち何らかの形に残していくことで、自身の大きな財産として後に人生を振り返れると思います。その為に基礎研究を推進し、海外への留学や交流を積極的にサポートしたいと考えています。形成外科は非常に狭い世界ですが、それ故に世界各国の形成外科医との距離は非常に近いと感

じています。世界と繋がる喜びや拮抗りを共有出来れば、医師人生はより豊かなものになると考えています。

多様性の時代の中で、各々の個性や主体性をしっかり尊重し、息の長い活躍、そして学風に根ざした国際性、進取性に富むグローバルな活躍が出来る様、「リサーチマインドを持った臨床医」そして「Surgeon scientist」の育成を行なえたらと思います。

柱となる領域を主体に国内外にむけた幅広い発信を行ない、新たな試みにも挑戦しながら、横浜市立大学形成外科をより一層発展させたいと思います。そして、得られた良質な診療手段を横浜並びに神奈川県地域医療に還元し、同門会の先生方より良い明日に繋がる医療を提供していきたいと思っています。これからどうぞ宜しく御願い申し上げます。

(2024年10月18日)

【学歴及び職歴】

1995年 3月 順天堂大学医学部 卒業
 1995年 5月 順天堂大学医学部附属順天堂医院 皮膚科 臨床研修医
 1997年 4月 順天堂大学医学部形成外科学講座 専攻生
 1998年 4月 順天堂大学医学部形成外科学講座 助手
 順天堂医院 麻酔科・整形外科研修
 1998年10月 加曽利病院 一般外科研修
 1999年 4月 順天堂大学医学部大学院 入学
 1999年10月 石井病院 形成外科医員
 2000年10月 千葉中央メディカルセンター（旧：加曽利病院）形成外科医長
 2003年 3月 順天堂大学医学部大学院 卒業
 2003年 4月 順天堂大学附属順天堂静岡病院（旧：伊豆長岡病院）形成外科医長
 2005年 4月 米国 ワシントン大学セントルイス 留学（ポスドク）
 2007年 7月 順天堂大学医学部形成外科学講座 助教
 2007年10月 順天堂大学医学部形成外科学講座 准教授
 2011年11月 順天堂大学医学部形成外科学講座 先任准教授
 2012年 2月 東京医科大学 皮膚科学講座 兼任准教授
 2017年 4月 順天堂大学医学部 形成・再建外科学 教授
 2017年 5月 順天堂大学附属浦安病院 形成外科・再建外科 教授
 2022年10月 横浜市立大学医学部 形成外科学講座 主任教授
 現在に至る



2003年 学位審査会にて



2003年 学術奨励賞



2007年 留学時 送別会にて

【賞 罰】

2003年 4月 日本形成外科学会 学術奨励賞 基礎部門
 2004年 4月 日本形成外科学会 学術奨励賞 基礎部門
 2007年 6月 ワシントン大学 形成外科 Best Basic Science Presentation
 2013年 4月 日本形成外科学会 学術奨励賞 臨床部門
 2016年 4月 日本形成外科学会 学術奨励賞 臨床部門

【専門医】

日本形成外科学会専門医、日本形成外科学会領域指導医、がん治療認定医、皮膚腫瘍外科指導専門医、創傷外科学会専門医、日本頭蓋顎顔面外科学会専門医、小児形成外科分野指導医、再建・マイクロサージャリー分野指導医、日本レーザー医学会レーザー専門医、日本臨床皮膚外科学会認定医、レーザー分野指導医、顔面神経麻痺相談医



2017年 順天堂大学附属浦安病院 教授就任祝賀会



2022年 日本血管腫・血管奇形学会

同門会会長に就任して

藤沢市保健医療センター
前 川 二 郎



横浜市立大学医学部に形成外科学講座が開設（2013年）されて程なく形成外科同門会が発足いたしました。私が初代講座教授に就任して、まず同門会を立ち上げることが重要な仕事の一つであると考え、戸塚で開業されている安藤晋一郎先生に初代の同門会長をお願い致しました。会の立上げという難しい役割を快くお引き受け頂き、安藤先生には大変感謝しております。また、安藤先生の後を引き継いで頂いたのは藤沢の湘南台で開業されている青木文彦先生で、会員が増えていく本会を上手くまとめて頂き、感謝の言葉もありません。安藤先生、青木先生は共に安瀬正紀先生の下で入局した世代（安藤先生は私の5年先輩、青木先生は同期）で、安瀬時代をよく知る同門です。安瀬先生から西條正城先生、吉田豊一先生、鳥飼勝行先生時代を経て、多くの若い医師が入局し同門会が大きくなっています。この度、同門会会長をお引き受けするにあたり、安瀬先生時代から今に至る横浜市大形成外科を経た経験を生かして、会をまとめていきたいと思っています。また、2022年に林礼人先生を新たに横浜市立大学医学部形成外科学教授として迎えました。この新しい教室を支えることが同門会の使命であり、これからの教室の発展を少しでも助けることができると考えています。末筆ではございますが、今後の形成外科学教室、同門会の発展と同門の先生のご健勝をお祈りして、就任のご挨拶とさせていただきます。

初代同門会会長として

横浜市立大学形成外科同門会 初代会長
安 藤 晋 一 郎



2013年に諸先輩を差し置いて初代同門会会長を拝命した安藤晋一郎です。私は1979年に当時としては珍しい横浜市大の2年のローテーション制研修医終了後に浦舟時代の横浜市立大学医学部附属病院形成外科に入局しました。当時の診療科部長安瀬正紀先生の下で形成外科の修業を始めましたが医局員はわずか7名で大学病院及び4か所の出張病院の仕事をこなしていました。文字通り目の回るような忙しさだったと記憶しています。その後関東労災病院形成外科部長伊藤仁先生の後任を9年務めさせていただき2000年より安藤形成外科皮膚科クリニックを戸塚で開業しております。紆余曲折はありましたが横浜市立大学形成外科は2013年に待望の形成外科学講座となり、初代教授に前川二郎先生が就任されました。以後前川先生の大変なご努力のもと関連病院、新入局員が飛躍的に増えるとともに大発展を遂げ、その後の講座としての業績など目を見張るものがあります。この度2代目の教授として林礼人先生をお迎えし、横浜市大形成外科も新たな時代に突入いたしました。新時代に向け、同門会の一員としてさらなる講座発展のため微力ながら尽力したいと思っています。

形成外科沿革

横浜市立大学形成外科は、1968年（昭和43年）に独立した診療科として開設された。これは日本の大学病院では5番目に古く、公立大学病院としては初めての診療科で初代科長は塩谷信幸が務めた。当初は塩谷に加えて外科や整形外科からのローテーション医師のみという布陣で、旧浦舟病院の第一新館と同時に開設された外来診察室、20床の病棟を舞台に奮闘した。その後全国各地から形成外科に興味を持った医師が集まり人員が増加したが、同時に県内外各地（県立こども医療センター、東横病院、国際親善病院、県立足柄上病院、掖済会病院、山手病院、信州の佐久総合病院など）から診療の依頼があり、それに奔走していく中で横浜市立大学形成外科は病院内外に徐々に認知され、他診療科や地域から必要とされるようになっていった。そしてそれは、現在に至る横浜市立大学形成外科の礎になっている。

1973年に北里大学形成外科が開設され塩谷が初代教授に就任すると、後任を安瀬正紀が務めた。縮小した陣容での再出発となったが、研修医制度が始まってから徐々に診療体制も軌道に乗るようになった。1977年には医局員が8名に増え、熱傷を中心として形成外科全般に対応するように診療体制が拡大していった。診療内容では、当時先端技術であったレーザー治療、西條が留学から戻り頭蓋顎顔面先天異常に対するクラニオフェイシャルサージャリーや、その頃盛んになった切断指再接着や遊離皮弁移植などのマイクロサージャリーの導入など、最先端部門の診療を積極的に行った。研究面でも、人体の皮膚血行動態の解明を行い、第22回日本医学界総会で形成外科部門代表発表に選ばれた。また、機能的頭頸部再建に関する論文が推薦論文となるなど、複数の領域での研究において評価された。人員の増加に伴い、県内の主要病院である、関東労災病院、県立がんセンターへの常勤医派遣、および、横須賀共済病院、藤沢市民病院、小田原市立病院、横浜市南部病院、船員保険病院などへの非常勤医派遣を行った。

高度救命救急センターと熱傷センターの設立、および安瀬の熱傷センター長就任を見据えて、1989年（平成元年）に安瀬に代わり、西條が後任となる新体制へ移行した。1990年（平成2年）に熱傷センターが開設されると、形成外科の診療体制をこれまでの形成外科部門と熱傷センター部門の2つに分け、西條が形成外科部長に、安瀬が熱傷センター長にそれぞれ就任し、新体制が本格的に始動した。1991年（平成3年）には金沢区福浦に医学部附属病院が開院し、福浦、浦舟の2院化に伴い西條、吉田が両病院の診療部長に任命された。また、これまで講座外診療科医務吏員であった身分が病院教員として認められ、助教授に西條、講師に吉田と前川が就任した。この時代は、Dr.Munro、Dr.Chenなど海外の著名な講師を招いての講演会開催をはじめとして、国際学会や海外施設研修への積極的な参加、海外から研修生の受け入れなどグローバルな活動を行った。また国内では1994年に安瀬を会長として医局初の全国規模の学会である第20回日本熱傷学会を主催するなど、より国際的・学術的な活動の基盤ができた。

1995年、西條の開業・退官に伴い、吉田が後任を務めた。この時代に道程は紆余曲折したもの、1999年7月に病院教授職を獲得した。この時代は5年間と短いものだったが、遊離空腸再建での空腸パッチ法に関する吉田の論文を始めとして、それまではあまり多くなかった国際ジャーナルへの論文投稿が徐々に増え始



め、口腔外科／耳鼻科など関連科の協力のもと前川・吉田が学位を取得するなど、病院教授職の獲得と併せて、教室としての土台が作られた時期と言える。

前体制の努力により獲得した病院教授職の公募・選考で2000年に初代教授として鳥飼勝行が赴任し、新体制へと移行した。同年、浦舟病院に変わって横浜市立大学附属市民総合医療センターが開院したこともあり、同院では鳥飼を教授として先天性の顎顔面異常を中心とした診療を、福浦の附属病院では吉田を部長として頭頸部再建外科の治療を中心とした診療をそれぞれ行う2本柱の体制となった。吉田退任後は前川が後任となり、リンパ浮腫の治療も附属病院の新しい柱となった。医局員の数が増え始め、スタッフの数が増えると同時に年齢構成も変化していった。それに合わせ、今まで非常勤医のみだった市中病院に常勤医師を派遣することが可能となり、スタッフの勤務施設の幅が広がるとともに、より地域に根ざした医療へも貢献できるようになった。医局主催の研究会／勉強会として横浜形成外科フォーラムが発足し、2003年に第1回が開催された。また、2006年に第11回日本手術手技研究会を、2009年に第32回日本美容外科学会総会（併催：日中形成外科学術交流会）を、2010年に第19回日本形成外科基礎学会をそれぞれ開催し、学会活動も活発に行った。さらに、2010年には附属病院・こども医療センターで大型の厚労省科研費を取得するなど、研究面でも業績を上げた。

2012年、長年の努力が実を結び念願の講座化が実現し、公募・選考を経て前川が主任教授に就任し、新体制が始まった。附属病院では引き続きリンパ浮腫と再建外科を中心とした診療・研究を、センター病院では佐武が准教授として自家組織移植を用いた乳房再建を中心とした診療・研究をそれぞれ行い、新しい2本柱の診療体制となった。講座化により基礎研究費や医学部教員ポストを獲得できたことに加え、形成外科学として大学院生を指導し学位申請が可能となるなど、医局の環境は大きく変化した。2013年度には形成外科学教室初の大学院生が生まれ、2013～2020年にかけて学位を持つ医局員が徐々に増えた。医局員の数も継続的に増加し、2015年に40名、2017年に50名、2021年には約60名となった。人員の増加にあわせ、2013年には横浜労災病院および横浜市南部病院が、2016年には横須賀市立市民病院が、2019年には茅ヶ崎市立病院が、それぞれ形成外科の常勤関連施設となった。2020年には佐武が新設である富山大学医学部形成再建外科・美容外科の初代教授に就任し、医局初の他大学教授となった。常勤を派遣している関連施設は2大学病院・救命センター以外で10施設を数え、大きな医局に成長した。研究に関しても、附属病院で経産省臨海特区プロジェクトリーダーの大型の研究費を取得したことに加え、文科省科研費も継続的に取得し研究成果を上げた。また、褥瘡学会神奈川在宅セミナー、日本シミュレーション外科学会、日本リンパ浮腫治療学会、形成外科手術手技学会など複数の学会・研究科を主催し、2020年に第29回日本形成外科基礎学会を主催した。



2022年、公募・選考を経て林が主任教授に就任し、新体制が始まった。これまでのリンパ浮腫の分野を引継ぎながら、林の専門分野である顔面神経麻痺、血管腫・血管奇形、皮膚良悪性腫瘍の症例が増え、外来並びに入院患者数、手術数の大幅な増加を生じている。レーザー機器2機種の新規導入や塞栓・硬化療法の遂行、さらに高難度新規医療技術を申請しての眼球角膜知覚再建や新規薬物療法の治験遂行など、新たな治療法の開発にも積極的に取り組み、幅広い分野での診療も展開している。2024年からは専攻医の受け入れ人数が7人に拡大し、海外からの短期留学生の受入も増加している。今後更なる医局の発展と飛躍を目指していく。

大学病院報告

横浜市立大学附属病院

【スタッフ】

主任教授：林 礼人

講師：北山 晋也

助教：三木 亭人、奥山 智輝

臨床指導医：澤井祐美加

専攻医：松本 優衣、川俣 友佳、

馬場英理子、飴井千佳乃、

飯塚 光輝

大学院生：川端 智貴



【施設紹介】

横浜市立大学附属病院形成外科は、先天性奇形、外傷性変形、腫瘍切除後の再建など、幅広い形成外科領域における高度医療を提供しています。特に、リンパ浮腫治療の実績を継承しつつ、新たに顔面神経麻痺再建や血管腫・血管奇形、皮膚悪性腫瘍、巨大母斑といった皮膚軟部腫瘍の治療に注力しています。レーザー機器も2機種を新規導入し、塞栓・硬化療法といった血管内治療、高難度新規医療技術としての角膜知覚再建や新規薬物療法の治験遂行など、新たな治療法の開発にも積極的に取り組んでいます。一方、頭頸部再建を中心に、乳房再建や肝動脈再建など様々な診療科に対する先進的な再建手術を遂行し、チーム医療の充実に貢献しています。診療はチーム制とし、スタッフが個々の患者に最適化された治療プランを提供しています。また、地域医療機関と密接な連携を図り、円滑な診療体制を構築しています。基礎研究・教育活動にも積極的に取り組み、次世代の医療発展と人材育成に貢献しています。（文責：三木亭人／林 礼人）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	492	1	493
腰麻・伝達麻酔での手技数	14	5	19
局所麻酔・その他の手技数	85	246	331
入院または全身麻酔の手技数計：592			
外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：251			
合計係数：717.5			

疾患分類	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷	37	4	11		4	30	86
先天奇形	19		2			4	25
腫瘍	252	1	26	1	1	128	409
瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド	8					12	20
難治性潰瘍	37	6	9			7	59
炎症・変性疾患	94	3	16			20	133
美容（手術）							
その他	11		21			16	48
Extraレーザー	34					29	63

横浜市立大学附属市民総合医療センター

〒232-0024 神奈川県横浜市南区浦舟町4-57

TEL：045-261-5656

【スタッフ】

小久保 健一

角田 祐衣

玉野井 慶彦

小林 沙彩

大井 皓介

大坪 翔

榮福 和希



【施設紹介】

当院は1871年西洋式病院として横浜に設立後、十全医院、横浜十全医院、横浜市立医学専門学校附属十全医院、横浜医科大学附属病院、横浜市立大学附属病院、横浜市立大学医学部附属浦舟病院、横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター、と名称を変え、現在横浜市立大学附属市民総合医療センターとなっております。浦舟町に当院が移転してきたのは1926年（大正15年）であり、2000年（平成12年）に現在の建物での診療が開始されました。

形成外科においては、2000年に青木文彦先生が部長になり、以降、鳥飼勝行先生、佐武利彦先生、小池智之先生を経て、2023年より小久保健一が部長をしております。

当科では、眼形成（小久保）、乳房（角田）、手外科・頭頸部再建（玉野井）の3本柱で成り立っており、これに加えて救命救急センターとの連携をとっています。今後バランスは変わる事はあるかもしれませんが、しばらく現在の体制を維持していく予定です。

（文責：小久保健一）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	421	5	426
腰麻・伝達麻酔での手技数	2	1	3
局所麻酔・その他の手技数	58	260	318
入院または全身麻酔の手技数計：486			
外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：261			
合計係数：616.5			

疾患分類	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷	176		10		1	14	201
先天奇形	15			2		6	23
腫瘍	162		7	2		177	348
癒痕・癒痕拘縮・ケロイド	18		1	1		22	42
難治性潰瘍	38	2	14			2	56
炎症・変性疾患	10		7			14	31
美容（手術）							
その他	2		19			25	46
Extraレーザー							

横浜市立大学附属市民総合医療センター 高度救命救急センター 形成外科チーム

【2024年度スタッフ】

黒柳 美里 （形成外科と救急医学の両教室に所属）
藤原 文麗 （形成外科学教室から出向）
池田 達也 （富山大学形成外科学教室から国内留学）

【施設紹介】

高度救命救急センターの『高度』は、救命救急センターで対応する疾患に加えて、①広範囲熱傷 ②切断肢・指 ③急性中毒に対しても24時間対応できることを示し、県内には2施設しかありません。当院高度救命救急センターの形成外科チームは、当院形成外科の協力も得て、『高度』に求められる①と②の診療を支えています。さらに、当センターは横浜市の重症外傷センターに指定されており、重症四肢外傷や顔面外傷の診療も担当しています。

＜高度救命救急センター 診療体制＞

病床数：EICU 12床、SDU 8床、一般病棟 27床

医 師：救急科（集中治療医・小児集中治療医含む）

形成外科、外科、整形外科、脳神経外科、循環器内科

【主な対応症例】

広範囲熱傷、化学損傷、電撃傷

手の外傷（切断指・肢含む）

顔面外傷（顔面骨骨折、挫滅創、涙小管損傷など）

皮膚軟部組織損傷（開放骨折・デグロービング損傷など）

熱傷・外傷後の瘢痕拘縮、褥瘡、難治性潰瘍 など

整形・脳外・外科との合同手術症例 など

（文責：黒柳美里）



関連施設報告

地方独立行政法人神奈川県立病院機構

神奈川県立こども医療センター 形成外科

神奈川県立こども医療センターは昭和45年に設置された小児専門病院で、施設内に小学校から高校までを併設するユニークな施設です。平成18年1月に新棟の運用開始となり、現在の体制（こども専門病院329床、障害児入所施設90床）になりました。発足当時の診療は2名体制でしたが、手術件数と新患者が増加したことに伴い、平成28年度より常勤医の増員が認められ4名体制になりました。また、県外からの新患者の増加に伴い手術枠は4日/週で全身麻酔手術400－430件/年になりました。唇顎口蓋裂における術前矯正治療の進歩とともに一度に口唇と顎あるいは口唇・顎・口蓋手術を行えるようになり、実際の手術術式としてはさらに50－70件増える計算です。他にも頭蓋縫合早期癒合症・小耳症などの頭蓋顎顔面疾患が多く、唇顎口蓋裂の出生前診断やセカンドオピニオンが増加しています。また、平成27年からは、再生医療新法下に「唇顎口蓋裂に対する多血小板血漿/フィブリン移植による顎裂骨欠損部への移植術」が厚生労働省より認可され行っています。

【スタッフ】

常勤医：4名

非常勤医 形成外科医：1名、矯正歯科医：2名、口腔外科医：1名

非常勤基礎研究員：2名 非常勤臨床研究員 形成外科医：2名

・神奈川県立こども医療センター 形成外科 HP

<http://www.kodomo-keiseigeka.kanagawa.jp/index.html>

・地方独立行政法人神奈川県立病院機構

神奈川県立こども医療センター 形成外科 HP

<http://kanagawa-pho.jp/osirase/byouin/kodomo/department/plastic.html>

（文責：小林真司）



横浜労災病院

【スタッフ】

部 長：山本 康（平成6年）専門医
副部長：矢吹 雄一郎（平成18年）専門医
常勤医：中野 生順（令和2年）専門医
専修医：今橋 優里花（令和4年）



思い起こせばあれば私と矢吹先生が大学で口をそろえて日々三上先生礼賛に勤しんでいた2011年の春のことでした。震災によって図書室内のデスクで崩れかけた本棚と医学書に危うく押しつぶされそうになった私は、自らの信仰のいたらなさ心に痛みつつ、4月には救命センターへ赴任することになりました。

救命センターでも、三上先生を讃える気持ちは忘れることなく、心を入れ替えて当時新任の主任教授であった森村先生の下で、春成先生をはじめとする優秀な救急科スタッフと良好な関係を形成し、瀧谷先生、柴山先生、門田先生、小池先生といった有能な形成外科の後輩にも恵まれ、とても楽しく充実した日々を過ごすことができました。

そんなこんなで2012年の晩秋、同年にめでたくも形成外科の初代主任教授に就任された前川先生がわざわざ救急科の医局を訪ねて来られて、「横浜労災が再建のできる形成外科を出してほしいそうなんだけど、行ってくれる？」と打診があったことがきっかけで話はとんとん拍子にまとまり、気が付いたらそろそろ横浜労災病院勤務12年目を迎えることになりました。

結論として、林礼人先生、講座主任教授ご就任おめでとうございます（敬礼！）。

（プチ施設紹介）

2023年はコロナが落ち着いてきたことで、ほぼ従来の診療実績に戻ることができました。2022年度より矢吹先生が赴任されてから、小耳症やリンパ浮腫の手術が開始され、更に診療の幅が広がっています。

（文責：山本 康）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

形成外科 新患者数：1213名 形成外科 入院患者数：207名

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	199		199
腰麻・伝達麻酔での手技数			
局所麻酔・その他の手技数	99	403	502
A) 入院または全身麻酔の手技数計：298			
B) 外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：403			
合計係数 (A+B/2)：499.5			

疾患分類	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷	40		1				41
先天異常	33		1			5	39
腫瘍	99		33			342	474
瘢痕・拘縮・ケロイド	5		2			19	26
難治性潰瘍	12		7			2	21
炎症・変性疾患	6		3			17	26
美容（手術）							
その他	4		52			18	74
レーザー							

関 東 労 災 病 院

【スタッフ】

部長：荻野 浩希

医師：佐治 詩保子

廣江 謙信

2024年4月1日現在



【施設紹介】

関東労災病院形成外科は、1969年伊藤仁先生により開設されました。

1991年に安藤晋一朗前部長が就任し2000年に部長交代し現在に至っています。

周囲の状況も変わり、2010年横須賀線（湘南新宿ライン）武蔵小杉駅、2023年には相鉄・東急直通線が開業しました。アクセスに2駅8路線あり非常に利便の良い環境にあります。武蔵小杉周辺に高層タワーマンションが建ち並び、ショッピングモールもでき諸先生方が勤められた頃とは一変しています。

関東労災病院は、610床、地域医療支援病院、災害医療拠点病院。地域がん診療連携拠点病院として地域の中核病院として機能しています。

2023年の業績は、入院手術353件、外来手術816件でした。地域支援病院として、顔面外傷の救急患者が多く、また入院治療では、軟部組織腫瘍、眼瞼下垂症、顔面骨骨折、下肢の難治性潰瘍、褥瘡などを主に行っています。Q-Alex・Q-YAG、Frunctional CO2などのLASER治療から小児の先天異常、頭頸部癌の再建まで幅広い治療を行っています。

（文責：荻野浩希）



【2023年度 疾患分類別手術件数】

「年間の麻酔別及び疾患大分類別手術手技数」

集計期間 2023年1月1日～2023年12月31日

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	123		123
腰麻・伝達麻酔での手技数	13	3	16
局所麻酔・その他の手技数	217	813	1080
入院または全身麻酔の手技数計：353			
外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：816			
合計係数：761			

疾患大分類手技数	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷	23		28		2	182	235
先天異常	8		2			4	14
腫瘍	75	1	53			356	485
瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド			2			6	8
難治性潰瘍	9	10	19		1	20	59
炎症・変性疾患		2	16			24	42
美容（手術）							
その他	7		97			12	116
Extraレーザー治療	1					209	210

横浜栄共済病院

〒247-8581 神奈川県横浜市栄区桂町132番地

TEL：045-891-2171（代表）

【スタッフ】

部長：岩瀬 わかな（平成14年卒）

医師：池田 浩明（平成30年卒）



【施設紹介】

当院は1939年に旧海軍燃料研究所に働く職員・家族に向けた職域病院として開設されたのち、戦後は国家公務員共済組合連合会に運営が引き継がれ、地域医療の中核となる病院として医療提供を行なっています。2019年に病院再整備事業が完了し、快適な療養環境と質の高い医療が提供できるよう努めています。

当院形成外科は、前任の醍醐佳代先生が2023年3月までの18年間にわたり部長を務められ、当科の発展に寄与なさいました。2023年4月からは岩瀬が部長職を引き継ぎ、現在は上記2人体制で診療を行なっています。手術対象疾患の内訳としては良性・悪性腫瘍、外傷、難治性潰瘍、眼瞼下垂などが多く、他科との連携を要する乳房再建、創傷治癒遅延・SSIへの介入なども増えています。また、レーザー治療（取り扱い機器：Ruby LASER、CO2フラクショナルレーザー、BBL/Skintite）やケミカルピーリング・イオン導入などのアンチエイジング治療にも力を入れています。

毎年多くの研修医が当科を選択して研修を行っており、当医局へ入局した先生も複数名おります。研修医からの要望もあり、2024年度からは1年次の後半から選択研修できるようになりました。

（文責：岩瀬わかな）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

疾患区分	外傷	先天異常	腫瘍	瘢痕 ケロイド	難治性潰瘍	炎症 変性疾患	その他	レーザー	合計
全麻	10	5	73	0	10	0	0	2	100
局麻など	111	7	372	6	24	17	67	259	863



済生会横浜市南部病院

〒234-0054 神奈川県横浜市港南区

港南台3丁目2番10号

JR京浜東北線 港南台駅より徒歩3分

【スタッフ】

医員：安藤 由茉

医員：大久保 亜貴

【施設紹介】

南部病院における形成外科診療は開院当初（1983年6月）から西條正城先生が非常勤医としてお立ち上げになり20年以上ご診療を継続されておりました。2009年より佐竹利彦先生が、非常勤体制での形成外科診療を再開され、2012年より常勤体制となり黄聖琥先生が1人医長として着任されました。2013年4月から2023年7月まで、長西裕樹先生が約10年間お勤めになり、常勤医3名体制まで診療を拡大されました。

長西先生がご開業に伴って南部病院をご退職された2023年8月以降は、若年者2名体制でなんとか診療を継続しております。長西先生のご退職後に、直面した問題は様々でしたが、そのうちの一つは、診療機器・手術器具の消失でした。今まで当然のごとく使用していたエコー、外来手術顕微鏡、マイクロ・眼瞼・眼窩涙道手術器具、衛生材料、事務用品など診療に関わるありとあらゆるものは、長西先生が自前で揃えていらっしゃったものだったため、なんとか病院や他科・他部署と交渉を重ねたり、工夫をすることで調整致しました。しかしながら、時には手術直前や術中に「あれも、自前だったのか…」「あれには、こんな意義があったのか…」と気づくこともしばしばあり、突然おこる予想外の状況に対処する貴重な経験をさせていただきました。

1年たった現在は、ようやく若年者2名体制の診療を安定して遂行できるようになりつつあり、主に、リンパ浮腫、眼瞼・涙道疾患、乳房再建、皮膚良性・悪性腫瘍が主な診療の傾向です。

歴史のある南部病院形成外科の診療を繋ぎ止めるべく、微力ながら今後とも尽力してまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

（文責：安藤由茉）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

	外 傷	先天異常	腫 瘍	瘢痕・ケロイド	難治性潰瘍	炎症・変性疾患	美 容	その他	レーザー治療	合計
全身麻酔	18	11	45	7	4	182	0	0	0	267
伝達麻酔・局所麻酔	61	28	232	6	21	61	0	67	0	476

藤 沢 市 民 病 院

【スタッフ】

医長：藤井 晶子

医師：上原 美華子

非常勤医師：澤井 祐美加



当院は昭和46年（1971年）10月に330床、18診療科で開院しました。形成外科は開院当初より開設しており、現在52年目となります。医局関連病院の中でも比較的古くからある施設と言えるでしょう。開設より2003年度までは非常勤施設でしたが、2004年度から常勤形成外科医の勤務する施設となりました。

現在は常勤2名（うち形成外科専門医1名）、及び非常勤医師1名の体制で診療を行っています。診療の中心となる分野は眼形成眼窩外科ですが、3次救急の救命センターを要しており地域がん診療連携拠点病院でもあるため、顔面骨骨折・四肢外傷後の皮膚軟部組織欠損などの外傷や、腫瘍切除後の再建（乳房・口腔等）に関しても他科と連携した治療を行っています。

（文責：藤井晶子）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	86		86
腰麻・伝達麻酔での手技数			
局所麻酔・その他の手技数	47	170	217
入院または全身麻酔の手技数計：133			
外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：170			
合計係数：218			

疾患分類	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷	20		2			7	29
先天異常	5		1			14	20
腫瘍	40		2			92	134
瘢痕・拘縮・ケロイド	2		1			6	9
難治性潰瘍	12		1			1	14
炎症・変性疾患	6		5			15	26
美容（手術）							
その他	1		35			35	71
レーザー							

藤沢湘南台病院

【スタッフ】

担当部長：篠木 美穂

非常勤：前川 二郎



【施設紹介】

藤沢・湘南台という二つの地名を冠した当院ですが、最寄り駅は湘南台ではなく長後駅、そこから歩くこと10分程度のところにあります。藤沢市北部に位置し、ほぼ大和市と言って差し支えありません。綾瀬市や横浜市泉区などから来られる患者さんも多い印象です。



比較的珍しい個人開設の病院ながらも形成外科との歴史は意外にも古く、黎明期は昭和63年（1988）まで遡ります。現同門会会長である青木先生が当時の院長から非常勤の依頼を受けたところから始まり、数代の非常勤時代を経て平成12年（2000）に常勤化され、初代部長に山本康先生が就任されました。

私は令和3年（2021）からお世話になっておりますが、時代の流れで翌年の令和4年（2022）から一人部長となりました。しかしながら、医局より非常勤枠の派遣をいただいている他、前教授の前川二郎先生にもリンパ浮腫専門外来を担当していただける運びとなり、大変心強く感じております。

院内は古き良き気風で、スタッフの皆さんは非常に好意的に接して下さいます。これも歴代先輩方のご尽力の賜物と深く感謝しております。今後もたくさんの伸びしろと共に次世代につないでいけたら幸いです。

（文責：篠木美穂）

【2023年度 疾患分類別手術件数】

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	10		10
腰麻・伝達麻酔での手技数			
局所麻酔・その他での手技数	24	154	178
入院または全身麻酔の手技数計：34			
外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：154			
合計係数：111			

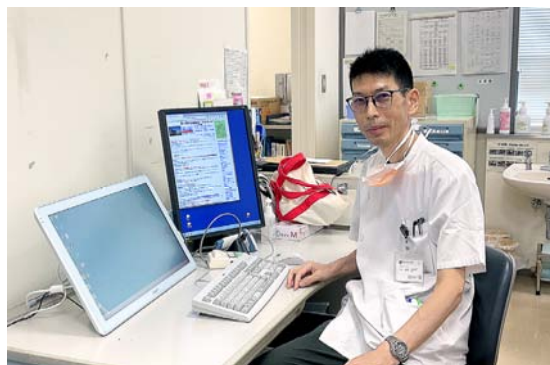
疾患分類	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷						5	5
先天異常	1					4	5
腫瘍	9		4			116	129
癬痕・拘縮・ケロイド							
難治性潰瘍						1	1
炎症・変性疾患			1			6	7
美容（手術）							
その他			19			5	24
レーザー						17	17

茅ヶ崎市立病院

住所：〒253-0042 神奈川県茅ヶ崎市本村5-15-1

電話：0467-52-1111（代表）

Website：https://hosp.city.chigasaki.kanagawa.jp



【スタッフ】

三上 太郎

茅ヶ崎市 公式キャラクター
「えぼし磨, ミーナ」



【施設紹介】

当病院の歴史は古いのですが、形成外科は2019年4月に開設されました。

開設当初からわたくしが1人で勤務しております。

開設してほどなく COVID-19 の時代に突入し、(日常のこまごまとした外傷を除けば) 緊急の手術を含めてさしたる実績の上がることなく経過しました(いわゆる神奈川モデルの契約病院でありましたため、手術や入院は相当に制限をかけられました)。

2023年の春以後、漸く「コロナ前」の状態に少しずつ戻るようになり、今後どのような地域貢献が出来るのか探り始めなおしたところであります。実のところ、茅ヶ崎市と寒川町を合わせた2次医療圏で、形成外科の専門医は2人のみ。かつ、自分以外のお一人は茅ヶ崎市の駅前で開業されている先生といった状態です。

地域の特性として海が近く気候も穏やかなため、「健康なお年寄り」、「サーファー」、「すこし裕福な外国人」、「若いご家族」が多い印象があり、自転車転倒やサーフボードによる外傷のほか、小児の外傷が多く来院されます(日本創傷外科学会からお達しの「ナオルンシール」は既に500枚以上わたしました)。

いわゆる公立病院の特性なのか、2024年度より「地方公営企業法の全部適用」になったとは言え、看護師さんや技師さんの離職者が少なくおっとりした方が多く、働きやすい病院です。

学究的な活動がしにくい点は残念ですが、そのあたりも機会をねらって手を広げていきたいと考えております。

文責：三上太郎

【2023年度 疾患分類別手術件数】

集計期間 2023年1月1日～2023年12月31日

	入 院	外 来	計
全身麻酔での手技数	25		25
腰麻・伝達麻酔での手技数			
局所麻酔・その他での手技数	63	77	140
入院または全身麻酔の手技数計：88			
外来での腰麻・伝達麻酔、局麻・その他の手技数計：77			
合計係数：126.5			

疾患分類	入 院			外 来			計
	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	全麻	腰麻・伝麻	局麻・その他	
外傷	3					38	41
先天異常	2		2			2	6
腫瘍	18		15			27	60
瘢痕・拘縮・ケロイド			2			1	3
難治性潰瘍			4				4
炎症・変性疾患	2		1			5	8
美容(手術)							
その他			39			4	43
レーザー							

追悼



とりかい かつゆき
鳥飼 勝行 先生

令和6年1月8日 ご逝去
享年（78才）

ご冥福をお祈りいたします

略 歴

昭和47年 3 月	横浜市立大学医学部 卒業
昭和47年 5 月	横浜市立大学病院 研修医
昭和49年 6 月	神奈川県立足柄上病院 整形外科
昭和50年 7 月	北里大学 形成外科 入局
昭和53年 4 月	北里大学 形成外科
昭和54年 4 月	横浜市立大学附属病院 形成外科
昭和55年 4 月	北里大学病院 形成外科
昭和56年 4 月	北里大学病院 形成外科 講師
平成 4 年 4 月	神奈川県立こども医療センター 形成外科 部長
平成 9 年 3 月	医学博士（北里大学2-841号）
平成12年10月	横浜市立大学附属市民総合医療センター 形成外科 教授
平成15年	第1回横浜形成外科フォーラム主催
平成18年	第11回日本形成外科手術手技研究会 会長
平成21年	第32回日本美容外科学会総会 会長
平成22年	第19回日本形成外科学会基礎学術集会 会長
平成23年	教授退官

鳥飼先生が残したもの

NACSクリニック リンパ浮腫センター北横浜
長 西 裕 樹

ほとんどの若い医局員にとって「鳥飼」という名を覚える価値は無い。形成外科専門医試験で唇裂・口蓋裂の術式に、その2文字が選択肢に上がることは無いだろう。唇裂・口蓋裂を何年もかけて学んだとて、大手美容クリニックや在宅診療所でちょっとレクチャーを受ければ出来る仕事よりも稼げないのが、日本の医療制度の実態である。でも意外に物好きがいるかも知れないので、鳥飼先生に関する見聞録を残してみよう。

2002年4月26日、鳥飼先生が手術中にボソッと発した一言が、研修2年目の私の耳に飛び込んできた。「この手術やってるの、世界で僕だけなんだよね…」と。卒業後なんとなく出身大学に留まり、美容外科で金儲けする妄想を抱いていた私は、すでに有名どころの形成外科を見学し、教授を含めてスタッフ3人という母校の貧弱さに驚いていたが、認識が180度変わった。個人の知恵と努力で、世界の唇裂・口蓋裂の治療体系を改革しようとする鳥飼先生の姿勢は、小狡い若者に目先の金儲けを忘れさせてしまうほど、キラキラの未来予想図を示していた。

それから鳥飼先生が2011年3月末に定年退職されるまでの9年間で、直属だったのは3年半だが、同じ病院内(救命センター)に居たり、先生の外勤先で手術助手をしたり、若手向け勉強会などで、毎月必ず会う(遭う?)生活だった。その間、“技は見て盗め”を実践しつつ、鳥飼先生はなぜ口唇・顎・口蓋一期形成法に辿り着いたのか、唇・顎・口蓋一期形成法が自分の一生を賭ける価値のあるものか、を調べ上げた。

鳥飼先生は1945年4月に横浜で生まれ、1972年3月(26歳)に横浜市大を卒業し、外科系研修を経て、1975年(29歳)に塩谷先生を慕って北里大学に移られた。その頃は唇裂・口蓋裂は眼中に無く、手外科や美容外科を志向していたそう。上石先生の口蓋粘膜弁法を学び、口蓋1981年(35歳)から専門外来主任として師匠の教を“守”り。1984年(38歳)からは、raw surfaceを無くす頬粘膜移植を追加して、師匠の成績を“破”った。1989年(43歳)からは、粘膜移植無しでraw surfaceを残さないFurlow変法に“離”れ、多くの識者が「裂幅が広いとFurlow法は無理だ」という“常識的”な主張をする中で、様々な工夫を凝らしてほぼ全例に適用できるFurlow変法を開発し、好成績を上げて“守破離”をcompleteされた。驚くべきは、そこに留まらず、幾多の先駆者が、口唇・顎同時形成や、口唇・口蓋同時形成から撤退した黒歴史を塗り替えるべく、1997年(52歳)に独自の口唇・口蓋同時形成法を、1999年(54歳)には口唇・顎・口蓋1期形成法を開発されたことである。鳥飼先生の術式の進化は、どんどんハイリスクハイリターン名人芸に偏っていったと誤解されているが、目標設定を下げることなく、手技の簡便さ、無駄な侵襲を加えないことを追求された結果である。

鳥飼先生が生涯で執刀または監督下で治療された唇顎口蓋裂は約400例(注:唇裂、口蓋裂単独は除いて)で、専門家としては特別多くはないと思われるが、1症例1症例を大事にして、世界でも類を見ない好成績を叩き出しておられた。特に、1984～1989年の粘膜移植粘膜弁による2期閉鎖法&2次骨移植、1989～1997年のFurlow変法による2期閉鎖法&2次骨移植、1997～1999年の口唇・口蓋同時形成法&2次骨移植の症例群については、整容と言語の成績を十分確保しつつ、正常値に迫る顎発育を実現し、顎矯正手術を要した割合は5%未満で、20～40%は仕方無いという当時の常識を覆していた。不運な親子の人生をどれだけ救ったか計り知れない。

1999～2010年の口唇・顎・口蓋1期形成法は、術前顎矯正により状況を整え、基本的な機能と形態を1回の手術で回復するという究極の治療法である。私が入局した2003年はその真っ只中で、より良い結果を求めて術前矯正と手術手技のバランスを検証している状況だった。その後、就学期を迎えた症例が増え、歯槽骨形成は良好で80%以上で2次骨移植が不要だったが、代わりに顎発育が悪化して80%以上で乳歯列期に歯科矯正を要することも明らかになった。私は、矯正治療が不要な症例が約15%もあることや、歯科矯正を要しても大半は十分回復出来ていたという事実から、原因と改善策を見出すべく分析を進めていたが、間に合わなかった。以前の症例の成績が良過ぎたこともあり、鳥飼先生の説明能力の不足もあり、様々な利害関係がもつれ、2008年（63歳）に非科学的な空気が充満したチームは崩壊した。

その後、鳥飼先生は何とか2011年3月（65歳）の定年まで職務を全うし、名誉教授の称号を与えられたが、口唇・顎・口蓋1期形成法を完成出来なかったことを、いつも気にしておられた。私も2002年の初心を貫くべく努力したが、一旦壊れた人間関係は、科学的データで修復出来るものではなく、むしろ政争に不都合なものは黙殺された。自分では十分な技量とEBMがあると思っけていても、そう簡単に世間は信用してくれない現実を思い知らされ、2016年を最後に口唇・顎・口蓋1期形成法を究める夢を諦めた。そして、先生から後を託された症例のほとんどが18歳を迎えたのを見届けて、2024年に大学での職務を終えた。

“最後の鳥の子”としての最後の奉公は、急に逝ってしまわれた鳥飼先生に替わり、このように後進に伝えることであろう。口唇・顎・口蓋1期形成法という究極の治療法を完成させるという夢はまだ輝きを失っていない、…はずだ。



口唇・顎・口蓋1期形成術の真皮縫合中の鳥飼先生
(2004年)

鳥飼勝行先生の思い出

ひらかわ矯正歯科 院長
平 川 崇

鳥飼教授と初めてお話したのは1992年に金沢で開催された日本口蓋裂学会の席上でした。質問マイクで議論したのが最初です。気まずい空気が流れ、真意が伝わらなかったと感じた私は、後日質問の趣旨についてお手紙をお送りしましたが、筆無精の鳥飼教授からは返事がくるはずもありませんでした。

出会いはそんな具合でしたが学会の度に、時には直接、時には他演者との問答を聞くうちに、お互いの興味に共通項が少なくないことを自覚しました。それまでも口唇裂・口蓋裂の治療を得意とする形成外科医であることは存じ上げておりましたが、お話しするようになり歯科的な事柄にも非常に興味を示されて、本当に口蓋裂治療に力を注がれている事が良く分かりました。実際に患者を共有するようになると、口の中を含め傷が非常に奇麗なことに驚きました。正しい手術法で丁寧に処置したことが良く分かります。瘢痕が少ないため矯正治療にも良く反応し、顎成長も好ましいものでした。

鳥飼教授は、横浜市立大学、北里大学、神奈川県立こども医療センター、横浜市立大学と所属を移動しながらも精力的に口唇裂・口蓋裂の治療を続けられました。今回改めて過去の学会でのご発表などを振り返ってみましたが、40年以上に渡り毎年休む事無く、口唇裂・口蓋裂の臨床知見を発表し続けていらっしゃいます。その情熱は他の追隨を許しませんが、時には空回りすることもありました。発表時間超過を指摘した座長に向かって『大切なことだから時間など気にするな』と言ったり、治療方針を手堅くとお願ひした連携科の医師に『試さなければ進歩は無い』と言い放ったりもしました。最近では、ご自宅に近い私のオフィスを突然訪ねられ、こちらが忙しいのも構わず、自分の言いたいことを話し続けて閉口したことが度々ありました。今でも突然現れそうな気がするスタッフが話しています。

個人的にお力を貸して頂いたこともありました。私が旧所属を退職した時には鳥飼教授のお力で、横浜市立大学と神奈川県立こども医療センターにポストを用意して頂きました。途方に暮れていたこの当時の事は、一生のご恩であります。

いま最も惜しまれるのは、山程の貴重な経験を鳥飼教授ご自身の口から聞けなくなったことです。鳥飼教授は沢山の種を撒きながら、ご自身で収穫すること無く逝かれました。残された我々は、散らばった宝を繋ぎ合わせる作業を続けるだけです。

鳥飼勝行先生、沢山のご厚情心より感謝致します。先天疾患の子供達へ素晴らしい手術を有り難うございました。安らかにお眠り下さい。そしてまた臨床の話をしましょう。

令和6年7月12日

鳥飼勝行先生を偲んで

北里大学医学部形成外科・美容外科学 主任教授

武 田 啓

私が塩谷信幸教授率いる北里大学形成外科に入門した1985年、鳥飼勝行先生は講師として活躍されていました。先生からは卓越した手技はもちろんのこと手術に臨む入念な準備や考え方など多くのことを学びました。毎週のように先進的な手術を行っておられ、とてもまぶしい存在でした。当時からご自分の趣味は形成手術であるとよく言われていましたが、粘膜移植粘膜弁法、口唇口蓋裂同時形成、骨延長をはじめ様々な術式の開発、研究に取り組んでこられました。1992年、前田華郎先生の後任として、先生がこども医療に行かれることが決まりましたが、北里大学で多くの患者さんをかかえておられたため、すぐに移動できませんでした。そこで研究員であった私がつなぎでこども医療センターに出向くことになり、瀬崎晃一郎先生とともにしばらく切りもしました。その後は北里大学で、今度は中北信昭先生が専門外来責任者として戻られるまで、口唇口蓋裂の手術を担当しました。医師8年目くらいだったと思います。当時、粘膜移植粘膜弁法を何とかやり遂げたものの、硬口蓋後端に瘻孔ができてしまいました。落ち込んでいたところ、大学に来られていた鳥飼先生に「この手術はしっかりプッシュバックされていることが最も大切でこれは後からリカバーできる」とおっしゃっていただき、気持ちが楽になったことを覚えています。手術の極意を語ることは少なかった先生ですが、その時は丁寧にコツを教えてくださいました。なるほどと思うことばかりでとても嬉しく、お優しい一面を感じたことを思い出します。

裾野の広い形成外科ですが、先生は様々な分野の学会活動も精力的に行っておられました。教授退任後もいつも会場でお会いしました。亡くなられた数日後に開催された北里形成外科フォーラムでもご発表の予定であり、タイトルは「アピアランス医療の創設」でした。エネルギーにあふれ、常に先を見て、新しいことに関心をもち続けられておられました。

先生は1945年の4月のお生まれです。勝行というお名前は戦時中だったことにも由来しているとご本人からお聞きしたことがあります。日本の復興とともに歩まれ、最大の趣味であったともいえる形成外科に魅了された人生だったのかもしれませんが。

我々に残していただいた教えに感謝し、多大なるご功績にあらためて敬意を表します。

ご冥福を心よりお祈りいたします。



2002年 医局旅行（熱海）



2006年 上石先生を囲んで



2006年 安瀬正紀 退任記念祝賀会



2010年 第19回日本形成外科学会基礎学術集会



2011年 鳥飼勝行教授最終講義 ヘボンホール



2012年 形成外科名誉教授就任祝賀会



2018年
医局創立50周年記念祝賀会挨拶

前川二郎前主任教授退任記念会報告



退任記念祝賀会を終えて

前 川 二 郎

東京で生まれ育ち初めて一人、滋賀で医学生としての大学生活を送ったことは、はるか遠い昔のこと、アパートでの一人暮らしでしたが、多くの友人を得ることができた楽しい学生時代でした。卒業後、1年先輩の久保田先生（現在、平塚市医師会長）を頼り、横浜市立大学病院（当時）の研修医として2年間の研修（整形外科、麻酔科、形成外科、脳外科、外科）を受け、形成外科をローテーションした際に、安瀬正紀先生の下で再建外科、熱傷、唇顎口蓋裂など先天疾患の治療を経験し、形を作る面白さを知り形成外科を志すことになりました。その時から退職までの40年間は、一言でいえば縁に恵まれた医師人生でした。まず、多くの素晴らしい恩師に出会えたことです。私が形成外科を志すきっかけとなった安瀬正紀先生は常に情熱を持って臨床を行い、部下に対してとても寛大な先生でした。何か新しいことをするのに「だめだ」と言われたことがなく、初めてリンパ管静脈吻合を行うときも励まして頂きました。いわゆる「医局制度」の封建的な雰囲気なく、自由闊達に臨床を行うことができたことは、今の自分の医師としての考え方に大きな影響を与えたと思っています。その後、西條正城先生、吉田豊一先生、鳥飼勝行先生と、形成外科手術の楽しさを教えて頂きました。さらに、聖マリアンナ医科大学の名誉教授で初代の形成外科学教授、荻野洋一先生には小耳症や唇顎口蓋裂の手術を教えて頂き、小児形成外科の奥深さを学ぶことができました。また、リンパ浮腫診療に携わることができたこともとても幸運でした。私がリンパ浮腫診療を始めた頃は外科手術や診断法については未だ未開拓の分野で、これら分野ではエビデンスが乏しく、ここでインドシアニングリーン蛍光リンパ管造影やリンパ管静脈吻合術の多くの経験がエビデンスに繋がり、いくつか大きな研究費を獲得することができました。これによって多くの教室員の学位取得に繋がったことは幸いでした。これまで私のリンパ浮腫診療や研究にご協力頂いた関係の皆様には深く感謝申し上げます。

附属病院形成外科部長に就任してから約20年間、外科系の診療科の先生とは多くの再建外科手術を担当させて頂きました。深夜に及び気が抜けない手術が多く重責を感じていましたが、大過なく診療を全うすることができたことは幸運であったと思います。これも歴代の病院長始め、横浜市立大学附属病院の関係の皆様のおかげと、感謝申し上げます。また、私の両親、妻、私自身もここで入院し治療を受けました。2016年には私自身が虫垂炎から腹膜炎をおこし、緊急手術を受け2週間入院しました。入院経験が無かった私が、不安を感じることも無く手術を受け無事退院できたことは附属病院の素晴らしさを感じた次第です。

最後の2年間は副医学部長として、益田、寺内両医学部長のもとで貴重な経験をさせて頂きました。お二人の学生に対する愛情を感じながら楽しく仕事をさせて頂いたことは、良い思い出です。その間にご指導を頂いた医学部関係の皆様には大変感謝しております。

また、形成外科学会関係の皆様、学会理事長はじめとして多くの先生に、お忙しい中ご出席頂き、ありがとうございました。学会ではデータベース管理部に長年所属して、現在のデータベースシステム構築に関与してきました。全国の形成外科医がどのような手術をどれだけ行っているか、形成外科学会のデータベースにより把握することが可能となりました。このような活動に関与することで医療を行って行く上でデータベースを含む医療情報管理の重要性を知ることができたことは幸いでした。日々の忙しい診療をしながら学会の仕事をするのはとても大変なことのですが、今後の形成外科の発展に繋がることであり、学会関係の皆様には今後のご活躍を願うばかりです。また、2020年の秋にはコロナ禍、第29回日本形成外科学会基礎学術集会をパシフィコ横浜ノースで開催することができました。開催時期には新型コロナ感染が落ち着き、無事に対面での学術集会を終えることができたことは、会の準備に関わっていただいた教室、同門会の皆様の助けがあつてのことと感謝申し上げます。

最後になりましたが、本会の準備にあたった林教授、青木同門会長、教室の先生をはじめ、駆けつけて頂いた同門の先生には深く感謝申し上げます。形成外科学教室は長い歴史がありながら、なかなか大きくなることのできない時代がしばらく続きました。鳥飼先生の時代になって教室員が増え、講座化された後もさらに人が増えてきましたが、彼らが診療できる場を確保する必要があると、多くの病院に協力して頂きました。教室を支えて頂く協力病院がなくては今の教室の発展は無かったと思います。お世話になっている協力病院の院長や関係の先生には深く感謝申し上げます。

今後ですが、生涯現役をめざして身体が動く限り、ゴルフができる限り、山登りができる限り仕事を続けるつもりです。リンパ浮腫治療に関しても新たな治療機器や材料の開発に関わっており、まだまだお役に立てると思っていますので、今後ともどうか宜しくお願い致します。

前川二郎主任教授退任記念祝賀会

2023年11月19日 ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル
三階 パシフィック



開会前に奥様とお二人で



医局長
梅田 龍 先生



司会
北山 晋也 先生

乾 杯



同門会会長
青木 文彦 先生

記念品贈呈



御 祝 辞



附属病院長
後藤 隆久 先生



形成外科学会理事長
貴志 和夫 先生



第2代主任教授
林 礼人 先生



医学部長
寺内 康夫 先生



前形成外科学会理事長
清川 兼輔 先生



名誉教授
鳥飼 勝行 先生



前川 二郎 主任教授退任記念祝賀会
2023年11月19日(日)

ロビー大階段で集合写真





閉会挨拶

前川 二郎 先生



鳥飼名誉教授 林第2代主任教授と3人で



たくさんのお祝いのお花



閉会後に 同門と記念撮影

教室年譜（2022年度、2023年度）



● 2022年3月31日 前川二郎初代主任教授 退任



最終講義を終えて

● 2022年10月1日 林礼人主任教授 就任



赴任後初の全員でのカンファレンス後に



病院・学部の辞令交付式



全国の様々な施設から数多くのお花の贈呈



● 2022年12月6日 ホームページ改定に向けた写真撮影



● 2022年 カンファレンスや回診、手術室にて



● 海外からの短期留学生、他施設からの応援医師、見学生



パリシテ大学から短期留学生



浅野 剛先生を迎えIVR治療



戸澤麻美先生が手術見学

● 2023年3月 小池先生、山本先生 退任時に

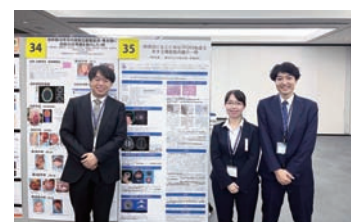


小池智之先生 退任時 センター病院にて



山本優子先生 退任時 附属病院にて

● 2023年4月 附属病院の新たなメンバー並びに学会でのひとこま



日本形成外科学会 総会・学術集会にて

日本皮膚悪性腫瘍学会にて

● 2023年9月 横浜市立大学形成外科 同門会



● 2023年12月 附属病院7-3病棟の合同忘年会



● 2023年・2024年1月 神奈川リンパ浮腫研究会



● 2024年1月 横浜形成外科フォーラム



久留米大学 形成外科・顎顔面外科学講座 清川兼輔先生から特別講演

● 2024年3月 年度末での思い出



上海での中国形成外科学会総会にて



梅田 龍先生 退任時 附属病院にて



小久保健一先生が理事長・学長表彰



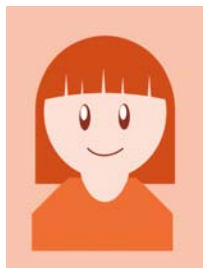
塩谷信幸先生、鳥飼勝行先生を交えて

新入教室員挨拶



飯塚 光輝（いづか こうき）

はじめまして。この春に入局させていただき、現在福浦勤務の飯塚光輝と申します。私の出身は神奈川県相模原市で、森村学園という高校から横浜市立大学を卒業し、長野県の佐久総合病院で初期研修をしました。私が形成外科を志すようになったのは、研修医1年目でローテートした時です。顔面骨骨折でドリリングをしたり、熱傷で植皮のメッシュ加工をしたことが本当に新鮮な経験で、一瞬で形成外科の虜になりました。もともと私の趣味がモノづくりで、木工・溶接・革細工などをやってきましたが、通ずるものがあつたのかもしれない。これからも初心を忘れず、真剣に楽しんで精進いたしますので、何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



今橋 優里花（いまはし ゆりか）

はじめまして、専攻医1年目の今橋優里花と申します。今年度は横浜労災病院にて勤務させていただいております。出身は大阪府で、中高は京都の学校で育ち、大学は産業医科大学（福岡県）を卒業し、初期研修から横浜に移住しました。出身大学では形成外科に触れる機会があまりなかったのですが、元々皮膚外科に興味があり、形成外科の道に進むことに決めました。卒業大学の義務年限のため勤務先に制限があり、労災病院での勤務が多くなる予定ですが、多くの先生方からたくさんの技術を学ばせていただきたいと思います。社会人としてもまだまだ未熟ですが、これから成長し続けられるように努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



榮福 和希（えいふく かずき）

横浜市立大学附属市民総合医療センターで専攻医1年目として勤務している榮福和希と申します。入局に際して簡単ではございますがご挨拶をさせていただきます。

私は鹿児島大学の出身で、それまでの学生時代も南九州で生活しておりました。鹿児島大学は形成外科講座がなく、中々形成外科に触れる機会がなかったのですが、私が勤めた初期研修病院に形成外科があり、そこで再建や外傷治療といった形成外科の魅力に魅了されました。

横浜市立大学でたくさんのことを勉強させていただきたいと思っています。まだ右も左もわからない未熟者ですが、皆様のお力になれるよう頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。



飴井 千佳乃（あめい ちかの）

この度、横浜市立大学形成外科に赴任し、同門会の一員に加えていただきましたこと、心より感謝申し上げます。私は富山大学に入局し、現在、専攻医1年目として横浜市立大学附属病院で研鑽を積んでおります。赴任当初は他大学から来たこともあり不安もありましたが、教授をはじめ、先輩方や同期の皆様の温かいご指導と支えのおかげで、徐々に執刀を任される機会も増え、充実した日々を送っています。充実した研修生活を送る中で、先輩方がミスフォローしてくださる姿勢や、代わりに頭を下げてくださる姿には感謝と尊敬の念を抱き、「私もこのような先輩になりたい」と、日々思いながら学んでおります。また、同期とはお互いに教え合い、反省し合う中で強い絆が生まれ、成長を実感する毎日です。昨年までは埼玉で働いていましたが、横浜の美しい海辺の風景に

すっかり魅了され、今では横浜での生活が大変気に入っています。今後も学会等でお会いする機会があるかと思いますが、その際にはどうぞよろしくお願いいたします。



池田 達也（いけだ たつや）

はじめまして。横浜市立大学附属市民総合医療センター 高度救命救急センターの池田達也と申します。この度、富山大学より1年間横浜市立大学の先生方のお世話になることとなりました。このような機会を頂き、感謝申し上げます。

簡単に自己紹介をさせていただこうと思います。私の出身は富山県で、初期研修は富山大学を中心に新潟県や北海道でも働いていました。趣味はウィンタースポーツやスキューバダイビング、旅行などで特にウィンタースポーツはスキー、スノーボードの2つを1日の午前と午後で滑り分けるほど好きで、スキー場がない神奈川県に若干の不安を感じているところです。救命センターでの勤務は救急ならではの大変さもありますが、周りの先生方にも恵まれ充実した研修を送れていると思います。医局の垣根を超えたこのような貴重な機会を頂けたことに感謝しながら、1日1日を大切により多くのことを吸収していきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。